

目次

- アジア中古車流通研究会のお知らせ
- 中国経済研究会のお知らせ
- 「老人力」再考
- 上海街角インタビュー ③⑩
- 中国の所得格差は縮小に向かう
- 【中国経済最新統計】

第9回 アジア中古車流通研究会

主催：京都大学東アジア経済研究センター

後援：京都大学東アジア経済研究センター協力会

2014年5月24日(土) 13時

於 京都大学経済学部 みずほホール (法経東館地下1階)

1. 挨拶

13:00-13:15

2. 報告

13:15-15:15

□孫 飛舟 (大阪商業大学 教授)

中国における中古車流通の新しい動き—「車王(カーキング)」の事例を中心に

□山崎 克彦 (TOYOTA SHIN-NONT UDONTHANI Co.,Ltd 代表取締役副社長)

タイ・ウドンタニにおけるディーラー経営

□斉藤 欽司 (スズキ㈱ 四輪アジア・アフリカ・中南米営業本部長)

インド新車ディーラーにおける中古車ビジネス

3. ディスカッション

15:15-16:15

研究会終了後 17:00-19:00 懇親会

なおこの研究会は京都大学東アジア経済研究センター協力会の法人会員・個人会員のみが参加できるクローズドな研究会です。非会員で参加希望の方は塩地 shioji@econ.kyoto-u.ac.jp まで協力会への入会手続きをお問い合わせください。

「中国経済研究会」のお知らせ

2014年度第1回（通算第40回）の中国経済研究会は下記の要領で開催することになりました。大勢の方のご参加をお待ちしております。

記

時 間： 2014年5月20日（火） 16:30－18:00

場 所： 京都大学吉田キャンパス・法経済学部東館2階 201演習室

報告者： 羅敏鎮（東京経済大学教授）

テーマ： 中国における生活ゴミ分別収集に関する考察：北京市の事例

注：本研究会は原則として授業期間中の毎月第3火曜日に行います。2014年度における開催（予定）日は以下の通りです。

前期：4月16日（火）、5月20日（火）、6月17日（火）、7月22日（火）

後期：10月21日（火）、11月18日（火）、12月16日（火）、1月20日（火）

（この件に関するお問い合わせは劉徳強（liu@econ.kyoto-u.ac.jp）までお願いします。なお、研究会終了後、有志による懇親会が予定されています。）

「老人力」再考

7. MAY. 14

中小企業家同友会アジア情報センター代表
東アジアセンター外部研究員（協力会副会長）
小島正憲

この2か月間ほど、全身がけだるく、得意の現場調査に出かけるのも億劫になっていた。しかし自己診断で、「糖尿病対策のため、厳しい糖質制限を続けており、ここしばらくご飯類を食べていないのと、大好物の甘いものを断っているせい」と思っていた。また生活面で、まったく展望のない実母の介護をだらだらと続けていることにも原因があると思っていた。一歩ずつ痴呆が進み、わけの判らない行動をとる96歳になる実母の姿に、私はやるせなさを感じ、無力感に苛まされ、その結果、ついつい実母に声を荒げてしまう。そして実母の悲しそうな顔を見て、ふと我に返り、再びやさしく接しようとする。そんな繰り返しの毎日だからである。

また最近、他人に会うのが面倒臭くなり、自室でパソコンに向かって原稿を書いている時間が多くなってきた。ときおり、読者各位からの返信で、「老人決死隊の結成はいつですか」とか、「国家の1000兆円の借金返済の秘策を教えてください」などという文言が送られてくる。それらは読者各位からの私への暖かい「激励と期待」の言葉だと素直に受け取っているが、それらを読む度に、両肩がずっしりと重くなる。それは私が今まで無責任な提言を繰り返してきた結果で、自業自得だとは思っているが、やはり「死」を数年先に選ばなければならないことを自覚すると、心が暗くなってしまふ。

かかりつけのお医者さんからは、「とにかく気晴らしに散歩をしなさい」と強く言われたので、妻と相談して、散歩用に犬を飼うことにした。ちょうど保健所の畜犬センターに、捨てられ保護された生後3か月のメスの雑種犬がいたので、それをもらってきた。ブランド犬ではなく、私にはぴったりの子犬であった。ところがこの子犬が期待に反して散歩嫌いで、一日中、寝ている。かくしてわが家には、「寝たがり実母と寝たがり子犬」が同居することになってしまった。私は目下、嫌がる実母を無理矢理デイサービスに追い出し、嫌がる子犬を無理矢理散歩に連れ出す毎日が続いている。

そんなとき、たまたま友人から「著名政治アナリストの講演会」へのお誘いの電話がかかってきた。あまり気乗りがしなかったので近況を報告し断ろうとすると、その友人はケラケラと笑いながら、「お前もとうとう“老人うつ”か」と、言い放った。その言葉を聞いて、私は「これが“老人うつ”なのか」と妙に納得がいった。電話を終わって私は、ふと「老人力」という言葉を思い出した。

15年ほど前、赤瀬川原平氏が「老人力」という題名の本を出版した。当時は、そのネーミングや着想などが奇抜だったので、巷を賑わせたものだった。もちろん私もその評判を聞き、すぐ買って読んでみた。しかしまだ50歳後半だった私には、ボケを逆手にとり「老人力」と楽天的に受け入れようとする発想は面白かったが、その他の点は読んでいて退屈な本だった。小浜逸郎氏は、「死にたくないが、生きたくもない。」（幻冬舎新書）で、「赤瀬川氏は、ぼけていく自然過程をそのまま素直に受け入れることを提唱していた」と書いているが、私も同感である。あれから15年、今、私は真正正銘の老人となった。果たして、「老人力」は活用できているのか、再び、この本を書庫から取り出し、読み直してみた。

1. 罪作りだった「老人力」の発想

赤瀬川氏は、凡人一般が「ボケて行く自分自身を悲観的に見る」という自己認識を、「老人力」という言葉を創り出すことによって、「楽観的に見させる」ことに成功した。つまり団塊の世代、つまり当時の高齢者予備軍が漠然と抱いていた「ボケることへの不安」を「老人力」という言葉で笑い飛ばしたのである。「老人力」は、団塊の世代の心を一時的に明るくすることに成功した。しかしながら、「老人力」は「ボケて行く自分」を抜本的に解決するものではなかった。したがってその事態を正視することなく、またその事態に備えることもなく、団塊の世代が漠然として高齢化した結果、笑い事では済まされない事態に追い込まれることになったのである。赤瀬川氏の「老人力」は、多くの高齢者予備軍に幻想を与え、高齢化つまり「ボケる」という現実から逃避させたという意味で、極めて罪作りの発想であったと、私は思う。現在、団塊の世代を含む高齢者をめぐる状況は、「老人力」では笑い飛ばせないものになっているからである。

小浜逸郎氏は、その著書「死にたくないが、生きたくもない。」のなかで、「私たちは“いつまでも枯れない”のではない。ほんとうは枯れかけているのに、その後もだらだらと生きてしまうので、“枯れきることが許されない”だけなのだ。(大学同期の集まりで)一人一人が近況を語るのだが、そこに、これから何をしていくかという抱負や野望のたぐいを表現することばがほとんどみられなかった。そして私自身も含めて、かつてけっこうざらざらしていた者がみな、いまではただの温厚な、いくぶん疲れたオヤジでしかないという印象だった。いろいろなことが面倒くさくなっていく。何かある行動をとることの意味が強く感じられなくなってくる。同時に、物事に新鮮な驚きを感じなくなるから、そのぶんだけ、怖いものや不安をかき立てるものが少なくなってくるとも言える。感情の起伏が平らかになってしまうのだ。年をとると分別がついてきたり、腹が据わってくるのはたしかである。しかしそれを裏返して言えば、世の中はどうせこんなものさという見きわめがついてくることでもある。どこへ行っても、だれと会っても、何をしても大体おんなじさ、という感覚。それがすなわち老いたということである。酷な言い方かもしれないが、老い始めた私たちの先行きには、輝かしいことはありえないだろうという覚悟をまず固めなくてはならない。輝かしさはじっと待っていればやってきてくれるものではない。そして輝きは自分の内部からは自然に遠去かる。つまり徐々に輝きを失っていただけなのだ」と書き、老人に諦観を勧めている。

熊代亨氏も、その著書「“若作りうつ”社会」のなかで、「年の取り方がわからなくなり、“自分探し”が延長しやすくなった結果、いつまでも自分自身のステータス向上やスキルアップに夢中なまま年を取っていく……というよりそれ以外になすすべを知らないまま年を取っていく人が増えていますが、そういう生き方は思春期には都合のよいものでも、年を取り、衰えを自覚するようになってくる年頃には向いていません。不惑、知命、還暦……と年を取っていくにつれ、スキルを習得するスピードは鈍くなり、せっかく築いたステータスも死ねば無に帰してしまうという事実を、だんだん無視できなくなってくるからです」と書き、これまた老人に諦めを勧めている。

私は上掲の小浜・熊代両氏のように、老人は老人らしく、自らの老化を客観視し、諦観を抱くことが必要であり、赤瀬川氏のように、わざわざ新語を造り出し、老化を糊塗し、老化及び死への準備を遅らせるべきではないと思っている。

2. 老人を巡る現況

国連の基準では65歳以上人口の割合が7%超で「高齢化社会」、14%超で「高齢社会」、21%を超えると「超高齢社会」とされる。日本は、1950年には65歳以上は全人口の5%未満だったが、2007年に超高齢社会となった。日本が高齢化率29.6%となる25年には、タイが16.1%、ベトナムが10.4%になると推計されている。つまり中国やASEAN諸国は高齢化が進んでおり、中国、ベトナム、タイなどは日本が経験したのと同様かそれ以上の速さで高齢社会を迎えると予測されている。高齢化にどう対応していくか各国の関心は高く、文化的にも近い日本の経験を自国の高齢者政策に生かしたいという期待は強い。最近では、オーストラリアでも高齢化社会に対応するため、10年後をメドに年金支給を75歳からにする予定だと聞いた。

樋口恵子氏は、その著書「人生100年時代への船出」のなかで、「世は長命社会になりました。私たち全員が“人生100年丸”の初代乗組員なのです。まだ航路図もできてなく、羅針盤もありません。人生100年を生きるにふさわしい航路図を工夫しながら社会のあり方、個人のよい生き方の初のモデルを示していく責任世代です」、「すべての人に共通する、先進国を中心にした長寿化の問題は、やがて開発途上国へと向かって行きます。地球はまるごと高齢化・長寿化。これは珍しいほどはつきり予測できる未来です。そのトップバッターである日本の責任は国際的にも大きなものであります」と書き、超高齢社会日本の果たすべき役割の重大さを説いている。

五木寛之氏は、その著書「新老人の思想」のなかで、「どう生きるかより、どう死ぬかが問題となる時代に入った」、「人生90年、という時代に私たちは直面している」、「人が長生きすることは、果たして本当に幸せなことだろうか」、「70、80、90がまれである時代は、すでに終わったのだ。古希とは第三の人生の前半の出発点であるにすぎない。第三の思想、哲学といったものは、はたしてどこに見出すことができるのだろうか」、「私たちは確実に“老人は荒野を目指す”時代にさしかかっている」、「みずから檣山をめざして歩きつづけなければならない」と規定し、大胆に、「長生きは決してめでたいことではない。じつはおそろしい世界なのだ。しかも、生きている限り、社会に大きな負担をかけながら日々を送るのである」、「いずれ人は老いる。青春の心を失わなければ人は老いない、などというが、それは願望

であっても現実ではない」、「大多数の高齢者はいずれ認知症か、病気か、寝たきりで介護を受けることになるだろう」、「実際に親の介護の経験を持つ人もいるだろう。そしてこれから先は、誰もが適当に、穏やかに死ねないことを知っている。認知症か、アルツハイマーか、寝たきりか、孤独死か、ガンか、いずれにせよ悲惨な将来は確実なのだ」、「死んで宇宙のゴミとなる前に、行きながら社会のゴミになる長寿の未来」と書いている。

さらに五木氏は、「世界中がかたずをのんで日本を見守っている。経済大国再登場への期待などではない。恐るべき急激な高齢化に、国としてどう対応するか、そこをみつめているのだ」、「やがて100歳社会が普通になると、歴史上はじめての世界が出現することとなる」、「老化を悪とする文化がある。そして死を敗北とみなす思想がある。私たちは21世紀に、それまでと違う文化をつくり出さなくてはならない。それは、老いることが自然であり、死もまた当然とする文化である」、「自然死も、平穏死も、死そのものを肯定する文化をつくり出すところから始まる。ただ楽に死ぬ、というだけでは意味がないのだ。喜んで死を受け入れる境地に達せよ、というのではない。武士道はいざしらず、死は常に残念なことである」と書いている。

小浜逸郎氏も上掲著のなかで、「年の取り方やライフサイクルの問題は、今、日本が直面している問題であると同時に、急激な先進国化を遂げるアジアの国々が直面しつつある問題でもあります。土着の地域生活や風習を脱ぎ捨て、たかだか数十年で高度産業社会や個人主義社会に移行していく国々の人たちは、今はGDPの高い伸びと、若々しいパワーに浮かれているかもしれませんが、しかし、それらの国も20年後、30年後には少子高齢化社会を迎え、そのとき、年の取り方について思考停止してきたツケについて再考させられる日がやってくるはずですよ」と書いている。

樋口・五木・小浜氏の「世界が日本に注目しているので、新たな思想を生み出す必要がある」という主張に、私も全く同感である。今、日本には、「高齢化社会を超克する思想」を生み出す絶好の機会と責務が与えられているのである。

3. 老年期の特徴

私は学生時代に、ある学習会で、「青年はなにものをも恐れない勇気を持っている。正義や理想に燃え、そのために死ぬことができる。それが青年期の特徴である。青年期は“人生の朝ぼらけ”である。真理を学べ、そしてその理想に忠実に行動せよ」という演説を聞き、感涙にむせび、身を奮い立たせたことがある。たしかそのとき、その理由として、「青年には守るべき家族、地位、財産、名誉などがまだなく、それらの桎梏にからめとられることがないからである」というようなことを聞いたことも覚えているが、そのことには、格別、疑問を感じなかった。

私は今、老年期の真只中で、この演説を思い出している。そして、青年という言葉で老人という言葉に入れ替えた方が、ぴったりするということに気が付いた。つまり、「老人はなにものをも恐れない勇気を持っている。正義や理想に燃え、そのために死ぬことができる。それが老人の特徴である。老年期は人生の黄昏である。真理を学べ、そしてその理想に忠実に行動せよ」と。そしてその理由として、「老人には、守るべき家族、地位、財産、名誉などがすでになく、それらの桎梏にからめとられることがないからである」と。さらにそれに、「老人はすべてをやり尽くし、満足している。老人にはいつ死んでもよいという覚悟ができていいる」という文句を付け加えることが可能である。これが老年期の特徴である。

4. 老人と死

私は若いとき、ある老僧の、「死とは、青年期には“”清水の舞台から飛び降りる“ようなものである。それが壮年期になると”縁側から飛び降りる“ほどのものとなり、老年期には”畳のへりをまたぐ“ぐらいのものになる」という講話を聞いたことがある。たしかに私も若いときは死が怖かったし、その老僧の言葉はよくわかった。しかし老年期になっても私は”畳のへりをまたぐ“境地には至らず、やはり死は怖いままである。

五木寛之氏は、その著書「下山の思想」のなかで、「老いは中年をすぎてはじまるように思い込んでいる人たちがいる。それは間違いだ。人はオギャアと生まれたその瞬間から、確実に老い始めるのである。しかし、実際に“死”などというものを実感できるようになるのは、青年時代ではない。ごく一部の変わった人間だけが、“死”を青年期において悩むのである」、「私たちに唯一、絶対とっていい真実とは、私たちはやがて死ぬ、ということである。それは究極の真実である」、「私たちは生を望む。死は遠くにあるほうが望ましい。私たちは未来を見通すことのできない愚かな存在なのだ。ちょっと冷静に考えれば、おのずと見えてくる真実から、あえて目をそらせようとする心の働きを持っている。自分の余命が、あと10年以内、いや5年くらいだろうと理解しつつも、それに対して向き合う姿勢がない。人間というのは、なんと困った存在なのだろうか」、「人間はいつか必ず世を去るときを選択しなければならぬのではないのか。それを自分で決め、周囲にも理解されて、おだやかに別れを告げる習慣が定着する時代を想像すると、なんとなく憂鬱な気がしないではない」と書いている。五木氏もまだ、“畳のへりをまたぐ”境地には達していないようだ。

曾野綾子氏は、その著書「誰にも死ぬという任務がある」のなかで、「死は実にいい解決方法だと思ふ場合がある。自殺はいけぬ。人殺しもいけぬ。しかし自然の死は、常に、一種の解放だという機能を持つ。痛みや苦痛からの解放だという場合もあるし、責任や負担からの解放である場合もある。周囲の人に、困惑の種を残していくという点で無責任だという場合はあるが、死ぬ側にとっては、自然に命を終えれば、死は確実な救いである」、「自分の生涯に納

得できれば、死を迎えやすくなる」、「老人は自ら納得し、自分の責任において、或る年になったら、自然死を選ぶという選択肢がそろそろ普通に感じられる時代になっている。これは自殺ではない。ただ不自然な延命を試みる医療は受けない、ということだ。そして万物が、うまれて、生きて、再び死ぬという与えられた運命をごく自然に納得して従うということは、端正で気持ちのよい推移なのである。それには、いつも言うことだが、その人の、それまでの生が濃密に満ち足りていなければならない。思い残しがあってはならず、自分の辿った道を“ひとのせい”にして恨んではならない。人は老齢になるに従って、具合の悪いことを他人のせいにしがちだ。死ぬまで人生の舵を取る主は自分だったと思える人は、あるとき、その人生を敢然と手放せるはずである」と書いている。曾野氏の考えは、“暈のへりをまたぐ”に少し近いようだ。

5. 「死にがい」の時代の到来

五木寛之氏は、その著書「新老人の思想」のなかで、「どう生きるかより、どう死ぬかが問題となる時代に入った」と主張している。「老いがい」の時代という本が出た。その他、巷には「古い」を題名に付けた本が氾濫している。しかし、今、必要とされているのは、「老いがい」などという中途半端な思想や「古い支度」ではない。まさに「死にがい」や「死に支度」の思想が必要とされているのである。その意味で、世は「生きがい」の模索の時代から、「老いがい」を素っ飛ばして、「死にがいの模索の時代」に突入しているのである。長寿が悪、老人が生きること自体が社会悪であるという前提に立って、「老人新思想」、「日本発姥捨て山思想」を確立しなければならないのである。たとえば災害などのとき、その思想の上で立って、高齢者の救出は後回しにして、若年者を先に助けるという道徳を確立すべきである。また安楽死や断食往生を、社会の中で容認し、そのための法的措置を取るべきである。もちろん「死にがい」の最高の形は、「社会の役に立って死ぬこと」、「犠牲的死」である。日本社会で「死にがい」論議が沸騰することを切に望むところである。

6. 老人の特権

死を恐れない老人には、特権がある。それは「無責任でよい」ことであり、「利那的でよい」ことである。

大津秀一氏は、その著書「死ぬときに後悔すること25」のなかで、「不思議なことに、忍従に忍従を重ねた人生は、極めて日本的であることもあり、皆から尊敬はされる。けれども、実は皆を惹き付けてやまないのは、“やりたい放題”の人生である。真似できないからこそ、魅了されるのかもしれないが、「だから、やりたいことは普段からどんどんやるようにし、他人に迷惑を(なるべく)かけないという前提で、もう少し好き勝手に生きてみても良いものと思われる」、「やりたいことをやらねば最期に後悔する。やりたいことはさっさとやるべきなのだ」と書いている。

鎌田實氏は、その著書「下りのなかで上りを生きる」のなかで、「どうせ下っている人生、やりたいことをやるのが大事と思っている。人に頭を下げてお願いをして、集まって来るお金を有効に使っていくことが大事だと考えている」と書いている。

中村仁一・久坂部羊の両氏は、共著「思い通りの死に方」のなかで、「たとえ結果が悪くても、自分で決めたことなら諦めがつきますよ。それに、何よりも大事なものは、それまでに納得のいく生き方をすることです。死に方は思いを超えたところで起きるので、その通りにはいきません。でも生き方は自分の思いの範囲内で充実させることができます。結果を気にせず、しかし死は視野に入れながら、思い通りにできる範囲のことを思い通りにすればいいのであって、あとは、おまかせですよ」と書いている。

上記のように、私は赤瀬川氏の「老人力」にかこつけて、私の「老人うつ」の状況から脱出する道を探り、私なりに論理的？に考えてみた。しかしながら青年期や壮年期のように心身を論理的に統御するのは難しく、思考の結果、「心が晴々し勇躍して次の行動に走る」という心境にはなかなか到達することができない。

私は若きころ、マルクス主義の洗礼を受け、長年にわたってそれを喧伝してきた。現在、私は、学問的でも論理的でもないが、マルクス主義の欠陥は「人類を労働者階級と資本家階級に2分化したことにあるのではないか」と思っている。もちろん私にはマルクスのように「資本論」を著し、それを論理的に解明する力はまったくない。しかし私にはそれを実践的に解明する力はある。私は死ぬまでに、どうしても「労働者階級と資本家階級を止揚した社会」を創り出したいと思っている。現在、バングラデシュではムハマド・ユヌスがソーシャル・ビジネスを展開しており、資本家階級の止揚を志向している。私はこれに労働者階級の止揚を付け加えたいと思っている。この私の社会実験を、若き哲学者たちが理論化してくれればよいのである。私は、これが私の究極の「死にがい」であると考えている。

しかしながらバングラデシュでの試行は、ビジネス上で時期尚早の感があり、強行するとわが社に迷惑がかかりそうであった。仕方がなく、その予備実験をミャンマーで行うこととし、3月末に工場の仮オープンに漕ぎ着けた。それでも老人が趣味半分で行うビジネスがあっさり成功するほど、世の中は甘くはなかった。やはりミャンマーにはミャンマーなりの難しさがあつた。この経過については、近いうちに、「続・多国籍中小企業奮戦記 ミャンマー編」としてまとめ、各位に送信させていただくつもりである。とにかくミャンマー工場の立ち上げで痛感したのは、「わが体力の衰え」であった。ちょうどミャンマーは猛暑の季節にさしかかっており、工場内は42℃になり、私の体力は2～3時間しか持たなかつ

た。とても技術指導などできなかった。本当に残念だった。「口」を出すことはできたが、「体」で教えることは不可能だった。私はそこでミャンマー人労働者と共に働きたかったからである。私は、夜、ホテルに帰って、無力感に苛まれた。そして自分の余命を考え、このままミャンマー工場を成功させることに拘泥してよいものかどうか悩んだ。そのとき私の脳裏には、カンボジアにおける新たなアイデアが浮かんでいたからである。今年中にミャンマー工場を成功させカンボジアにおける試行にも着手しなければ、その前にわが命の灯が消えてしまうかもしれない。私は焦ったがどうしようもなかった。

私はこれまで、常に現場で陣頭指揮を取って来た。それが私の誇りであり、支えでもあった。陣頭指揮こそが、経営者としての私の経営スタイルであり、全社員の生活の安定のために、利益を上げ続ける保障でもあった。しかしとうとうそれができなくなった。私は若い頃から、極左的傾向が強いと言われており、アップ・ダウンの激しい性格であった。最近になって、私はこの性格を、「老人うつ」というよりも「老人躁鬱」と表現した方が適切かもしれないと思うようになった。また、いつも「馬鹿げた夢を追いかける」のみで、地道な努力をあまりせず、とにかくやみくもに走っていくので、わが社の社員には迷惑をかけ続けてきた。それでも今までは陣頭で旗を掲げながら、勇ましく走ることができた。しかし残念ながら、今ではその得意技も使うことができなくなった。私は落ち込み、悩んだ。

そして回答を見つけるため、多くの「老人関連本」を読み、思いを巡らせてみた。そして現時点で、私は「“老人の特権”を行使する」という一つの結論に到達した。誤解を怖れず言えば、私は「無責任でもよい」、「刹那的でもよい」と思い切り、「若い人たちがあとをやってくれるだろう」と考え、「やりたいことを思い切ってやる。生きている間に、自分のやりたいことをやりつくす」という決意を固めたのである。これからの私の行動は、「花火のように派手だが、すぐに消えてなくなってしまうような中味のないもの」と非難されることだろう。

私は、自分の特徴は、「独創的なアイデアとその実行力」にあると考えている。今、私の頭の中には、たくさんのアイデアが詰まっている。しかしながら、それらをすべて陣頭指揮で実行に移していくには、時間と体力が決定的に不足している。だからあえて中途半端のそしりを受けることを覚悟で、「やりたいことを、やりっぱなそう」と考えたのである。もちろん老人決死隊や1000兆円の借金返済もあきらめたわけではない。

私は「弁慶の立ち往生」のような「死に様」を理想とする。

※参考文献と参考箇所

1. 「老人力」
2. 「老いの生き方」
3. 「老いを生きる暮らしの知恵」
4. 「死にたくないが、生きたくない。」
5. 「〈老いがい〉の時代」
6. 「若作りうつ」社会
7. 「下山の思想」
8. 「下りのなかで上りを生きる」
9. 「誰にも死ぬという任務がある」
10. 「死ぬときに後悔すること25」

1. 「老人力」 赤瀬川原平 ちくま文庫 2001年9月10日（初出:1998年9月10日）

- ・ふつうは歳をとったとか、モーロクしたとか、あいつもだいたいボケたとかいうんだけど、そういう言葉の代わりに、「あいつもかなり老人力がついてきたな」というふうにするのである。そうすると何だか、歳をとることに積極性が出てきてもいい。歳をとって物忘れがだんだん増えてくるのは、自分にとっては未知の新しい領域に踏み込んでいくわけで、けっこう盛り上がるものがある。
- ・老人力なんてもともとは冗談なんだけど、老人力と聞いたとたんにみんな一気にそれを理解して、冗談じゃなくなるのである。
- ・そもそも老人力とは、転んでもただでは起きない力のことである。というか、そもそも老人とは、人が間断なくゆっくりと転んでいく状態のことである。人類の全員がゆるゆると、やんわりと、気が付けば転んでいる状態なのだ。それはわかっている。でも転んでもただでは起きない力が老人力というものではないだろうか。ボケるには違いないけど、そのボケを何とか自分の人生の得点とする。物忘れはたしかだけど、それをたとえばゆとりとして活用する。まあやり方はいろいろだけど、超スローモーションのようにゆっくりと転んでいながら、その裏側でゆっくりと、ただではなく起き上がっていく。両手いっぱい拾っているのは、人それぞれ、何かはわからない。
- ・老人力というのはいわば現役を離れた世界の力学で、離れた所で何ごとかをやっていることが何かしら味わい深い。
- ・老人の迫力とは何だろうか。老人一人、という場合はとくにわからなかったが、老人の団塊を前にすると、何かしら「背水の陣」というものを感じてしまう。背水の陣でこちらを見る目があるのである。それが一人ならともかく、たくさんの背水の陣の目が並んでこちらを見ている。聴衆全員の向こうが背水で、海が控えているのだ。波打ち際がもうそこまで来ている。それはやはり若者の目とは違う。若者は背水の陣どころか、砂浜でビーチバレーか何かかして、ふと一休みしたついでにこちらを見ている。背水といったって、泳ぐ体力もあるだろうし。
- ・あの世というのが、どうもはっきりしないのが、人間みんなの悩みの種である。

2. 「老いの生き方」 鶴見俊輔編 ちくま文庫 1997年9月24日（初出:1988年8月）

〈 W・サマセット・モーム 〉

- ・老人はもはやアルプスに登ることも、きれいな女をベッドに転がすこともできないのは事実であるし、もはや他人に色欲を起こさせることができないのも事実である。それは失恋の痛みや、嫉妬の苦しみから解放されたものである。じ

つにしばしば若い人を毒する羨望の念が、欲望の消失によってやわらげられたものである。しかしこれらは消極的な償いであって、老年には積極的な償いもある。逆説的に聞こえるかもしれないが、老年の方が時間の余裕がある。あまり時間がかかるというので、若いときには避けるような仕事にも、老年になると、ぞうさなくとりかかれるものである。老年になると、趣味もよくなり、若いときには判断を歪める個人的な偏見なしに、美術や文学を享楽することもできる。老年には、老年なりの成就の満足がある。老年は人間の利己主義の拘束から解放される。ついに解放され、魂はうつろいゆく瞬間を楽しむが、それに止まれとはいわない。老年は絵模様を完成したのである。

- 私はある種の老人のように青年たちから理解されようとも思わない。また青年たちに人生教訓をさずけようとも思わない。ただ人生を茫漠たる一場の夢と観じて死にたいのだ。そして人生は模糊たる霞の中にぼかし去るには毫碌状態が一番良い。
- 私は死を手なずけながら死にむかって一步一步近づいていこうと思う。若い時代には恐ろしい顔をして私をにらんでいた死も、次第に私に馴れ親しみ始めたようだ。私はようやく自分が握れた死の手綱を放して二度と苦しむことがないように老耄の薄明に身をよこたえたいと思う。

〈 幸田 文 〉

- 老いて失ったものをなげくことはない。新陳代謝だと思えばいい。
- 老いの自覚があったら、ともあれ、体力能力気力、その他一切の持ち物の、現在高を確認すること、その上で何なりと選ぶ道を決めることです。終わりよきものすべてよし、です。すっきりした老後を送ることは、先に行く者が後の人へ遺す、元気のもととそう大げさにいわずとも、あなたが私が、いささか子に贈る思い出になりませんか。

3. 「老いを生きる暮らしの知恵」 南和子 ちくま文庫 2010年5月10日 (初出：2007年)

- 「ウツ」も病気の一つである。風邪を引いたときでも、とりあえずは暖かくして早く寝て、できれば一晩で少しでも軽くなるようにするだろう。それと同じように、自分なりに、自分を大切に、少し甘やかす、友人にも助けをもらって、暗い考え方から抜け出せるようにしたいと思う。あせる必要はないが、軽い状態のときに、ちょっとした工夫を試みよう。それでもだめなら、専門医に診てもらって、できるだけ毎日を明る暮らしたいものである。
- 定年を迎える年齢になると、これまでやりたいと思いつてもできなかったことなど、自分の好きな趣味やスポーツをはじめの人が多く、それが何であれ、条件的に可能なら、高齢になってから「ずっとこれがやってみたかったの」「今からでも上達したい」という新しい夢を持つことは、想像以上に生活にはりあいができる。

4. 「死にたくないが、生きたくもない。」 小浜逸郎 幻冬舎新書 2006年11月30日

- 私たちは「いつまでも枯れない」のではない。ほんとうは枯れかけているのに、その後もただらと生きてしまうので、「枯れきることが許されない」だけなのだ。
- (大学同期の集まりで)一人一人が近況を語るのだが、そこに、これから何をしていくかという抱負や野望のたぐいを表現することばがほとんどみられなかった。そして私自身も含めて、かつてけこうぎらぎらしていた者がみな、いまではただの温厚な、いくぶん疲れたオヤジでしかないという印象だった。
- いろいろなことが面倒くさくなっていく。何かある行動をとることの意味が強く感じられなくなっていく。同時に、物事に新鮮な驚きを感じなくなるから、そのぶんだけ、怖いものや不安をかき立てるものが少なくなっていくとも言える。感情の起伏が平らかになってしまうのだ。
- 年をとると分別がついてきたり、腹が据わってくるのはたしかである。しかしそれを裏返して言えば、世の中はどうせこんなものさという見きわめがついてくることでもある。どこへ行っても、だれと会っても、何をしても大体おんなじさ、という感覚。それがすなわち老いたということである。
- 酷な言い方かもしれないが、老い始めた私たちの先行きには、輝かしいことはありえないだろうという覚悟をまず固めなくてはならない。輝かしさはじっと待っていればやってきてくれるものではない。そして輝きは自分の内部からは自然に遠去かる。つまり徐々に輝きを失っていくだけなのだ。
- 60歳以上も何か仕事に就いていたいという欲求の源は、自分が社会的存在としてのアイデンティティを保っていたいところにある。
- 私は若いころ、キリスト教が自殺を厳しい罪としていることがよく飲み込めず、一神教の教義はすいぶん勝手だと思っていた。「神によって与えられた命をみずから決することは神にたいする冒瀆である」というその論理は、実存に触れ得ないただの理屈であるような気がしていた。
- いっぽうに、「長寿はそれだけで素晴らしい」という偽善的で抑圧的な思想があり、他方に、「周囲には負担や迷惑をかけずに早くあっさりとして逝く方法はないものか」と感じている高齢者候補生がいる。大多数の人はその中間あたりをあさましいながら生きて行くほかないものだ。
- 普通の人は、欲望の視界を徐々に縮こませながら、日常的な営みにかまけることで孤独と不安を糊塗しながら、なるべく迷惑とご厄介にならないように気遣いながら、何だかしょぼしょぼと老いていくのである。別に「よく生きる」ことなどいまさらできるわけでもなく、ゆっくりと老いてゆくのである。長生きしたって、そんなにいいことがあるわけがな

いが、それでも長生きしてしまうのである。

- 自分が未知の可能性のうちに投げ出されていればいるほど、かえってこの独特の自由感は得られない。人生が下り坂になって、残りの命数が視野に入ってくると、けっこう寛容でのびのびとした態度がとれるのである。
- 青年期の自由は行動の自由だが、熟年期の自由は態度の自由である。また、青年期の不自由は自意識の不自由だが、熟年期の不自由は能力の不自由である。
- 格別長生きなんかしたくない。でも多くの人は長生きしてしまう。そのとき私たちはどんなふうに生きればよいのだろうか。長生きしてしまうことが避けられないなら、そうした小さなつながりを大切にしたいものである。老いて後の成熟ということがありうるとしたら、こうしたつながりの隠れた意義がよく身に沁みてわかるということにおいてほかにはない。読者諸兄。どこかへ力強いぎなうことのない凡庸な結論で、面白くなかったかもしれません。でも現実って、そういうものでしょう？

5. 「〈老いがいい〉の時代」 天野正子 岩波新書 2014年3月20日

- 老いはもはや「生」のゴールではない。可能性にみちたスタートではないか。「生きがいい」より〈老いがいい〉の方が、「生」のよりふさわしい表現ではないのか。
- 人生の最初の20年、いいかえれば青年期にさしかかるまでのコースは比較的等質である。対照的に、人生の最期の20年は、一つのカテゴリーに括ることができないほど、多様性と個別性に富んでいる。鏡に反射する光の角度によってさまざまな色や模様、図形が浮かび上がる万華鏡のように、この多様性と個別性こそ、高齢化社会の豊かさでもある。人と老いの出会いの場には、それまでの人生が流れ込み、人それぞれに独自の意味場が作り出される。〈老いがいい〉と言い換えてもよい。

6. 「若作りうつつ」社会 熊代亨 講談社現代新書 2014年2月20日

- 年の取り方がわからなくなり、「自分探し」が延長しやすくなった結果、いつまでも自分自身のステータス向上やスキルアップに夢中なまま年を取っていく……というよりそれ以外になすすべを知らないまま年を取っていく人が増えていますが、そういう生き方は思春期には都合のよいものでも、年を取り、衰えを自覚するようになってくる年頃には向いていません。不惑、知命、還暦……と年を取っていくにつれ、スキルを習得するスピードは鈍くなり、せっかく築いたステータスも死ねば無に帰してしまうという事実を、だんだん無視できなくなってくるからです。
- 思春期心性は、自分探しや自己実現には必要不可欠でも、次の世代を育むには向いておらず、老いを受け入れ、死と対峙するには全く不向きです。
- 私たちは死に思いを馳せなくて済むようになった反面、「命は続いて当たり前」と勘違いしながら暮らすようになった。
- 地域のお年寄りが政治を司り、家父長的な価値感がまかり通っていた時代の「あるべきお年寄りの姿」とは、もっとおっかなくて貫禄のある、畏怖のニュアンスを含んでいたように思います。
- 現代のお年寄りはたいいていのが80歳近くまで生きられるようになった反面、お年寄りには認知症の影に怯えなければならず、孤立したなら孤立したなりに、家族があるならあるなりに心配しなければならなくなりました。若さを至上とする社会風潮のなか、お年寄りをリスペクトする精神は衰退し、少なくともお年寄りが無条件で尊敬されるような時代は終わりました。
- 今、お年寄りが若い世代から尊敬されるためには、なんらかの年の功を示さなければなりません。文化資本、精神的円熟、社会関係資本—なんでもいいですが、そういった年の功を具体的に示せない、ただ年を取っているだけのお年寄りは若年世代から厄介者扱いされやすく、自己のみじめさに拍車をかけられやすくなりました。
- リアリティを欠き、尊敬を欠き、宗教を欠き、若さを至上の価値とみなす社会情勢のなかでいかに円熟した老いを実現していくのか？ 現代のお年寄りにとって、生き甲斐のある老後とはどのようなもので、老いや死を直視するとは、どういうことなのか？ こうした問題は、現代のお年寄りの課題であると共に、今、人生の春に浮かれている人びとにも巡ってくる課題でもあります。お年寄りを邪険にしたところで痛くもかゆくもない若年者として、若さ至上主義を内面化したまま年を取っていけば、いつかは他人事ではなくなるのです。その際、若さ至上主義を強く内面化している人ほど、自分自身の信ずる価値に復讐され、老い衰えた自分自身を裁かなければならなくなるでしょう。
- 老いや死を前提とした人生の再設計
- 年の取り方やライフサイクルの問題は、今、日本が直面している問題であると同時に、急激な先進国化を遂げるアジアの国々が直面しつつある問題でもあります。土着の地域生活や風習を脱ぎ捨て、ただかか数十年で高度産業社会や個人主義社会に移行していく国々の人たちは、今はGDPの高い伸びと、若々しいパワーに浮かれているかもしれませんが、それらの国も20年後、30年後には少子高齢化社会を迎え、そのとき、年の取り方について思考停止してきたツケについて再考させられる日がやってくるはずですよ。
- 世代間コミュニケーションにこそ、年を取っていくための希望や可能性があるのではないかと考えています。
- 「年の取り方がわからないなら、上下の世代と学び合おう」。もし本書に結語があるとすれば、私はそんなフレーズを思い浮かべます。

7.「下山の思想」 五木寛之 幻冬舎新書 2011年12月10日

- ・私は1932年に生まれた。いわゆる昭和ヒトケタの世代である。幼児期から少年時代の入り口までを、戦争の時代に生きてきた。その時代を生きてきた一人として、私には耐え難い心の痛みがある。あの戦争のさなかで、私たちは事実を事実として直視することなく、知らぬふりをして過ごして来たというふかい反省である。
- ・登ったら下りる。これは、しごく当たり前のことだ。登頂したあとは、麓をめざして下山するのである。永遠に続く登山というものはない。しかしこの下山ということについては、あまり人は意識しないように思われる。実際に登山ということについては、あまり人は意識しないように思われる。そこにはやはり、「下る」ということに対する軽視の感覚があるようだ。登ることについては熱中でできても、下りること、下ることにはほとんど関心がない。それが私たちの普通の感覚である。しかし私はこの「下山」こそが登山のもっとも大事な局面であると思われてならないのだ。
- ・私たちは起ちあがらなければならない。新しい目標にむかって。しかし、それは再びの登山ではないだろう。私たちはすでに山頂をきわめて、下山にさしかかっているのだ。その途中で、思いがけない大災害に見舞われたのである。
- ・この国が中国に抜かれるまで、世界第2位の経済大国であったということが、じつはすごいことだったのである。まさに一時代を画した歴史の奇蹟といいいい。私たちはそれを誇っている。しかし、すごいことというのは、そうとうな無理をしなければできないことである。そして、当然のことながら、ずっとすごいことを続けることはできない。
- ・私たちは、生き残った者の一人としていま生きている。戦争の時代を生きのびた幸運な者の一人として。そして、戦後の繰り返した災害のなかからも、生き残った。その生き残った者の一員として、私たちはどのようにこの現実を歩いていけばいいのか。私にはまだその道筋は見えていない。第二の戦後を迎えて、途方にくれているだけだ。
- ・下山する、ということは、決して登ることに比べて価値のないことではない。一国の歴史も、時代もそうだ。文化は下山の時代にこそ成熟するとはいえないだろうか。私たちの時代は、すでに下山にさしかかっている。そのことをマイナスと受け取る必要はない。実りある下山の時代を、見事に終えてこそ、新しい登山へのチャレンジもあるのだ。少子化は進むだろう。輸出型の経済も変わっていくだろう。強国、大国をめざす必要もなくなっていくだろう。そして、ちゃんと下山する覚悟のなかから、新しい展望が開けるのではないか。下山にため息をつくことはないのだ。
- ・あらゆる意見は仮説である。情報には必ずバイアスがかかっている。はっきりした真実は、明日のことはわからない、この一点だけだ。
- ・格差社会というのは、金持ちと貧民が同居する世の中のことである。富める国とか、貧しい国とかいう分け方ではなく、一つの国家、一つの社会に、その両方が混在するというのが格差社会の本質だろう。デフレのなかのインフレ、インフレの中のデフレ、資本主義的社會主義、社会主義的資本主義、というのはそういうことである。健康とか、病気とかいう世界にも、このことはあてはまる。私たちの身体の内には、その両方が混在し、しかも時々刻々と変化しつつ年を重ねていく。黒か白か、善か悪か、という世界は、すでに失われてしまっているのだ。
- ・老いは中年をすぎてはじまるように思い込んでいる人たちがいる。それは間違いだ。人はオギャアと生まれたその瞬間から、確実に老い始めるのである。しかし、実際に「死」などというものを実感できるようになるのは、青年時代ではない。ごく一部の変わった人間だけが、「死」を青年期において悩むのである。
- ・私たちに唯一、絶対といいいい真実とは、私たちはやがて死ぬ、ということである。それは究極の真実である。
- ・私たちは生を望む。死は遠くにあるほうが望ましい。私たちは未来を見通すことのできない愚かな存在なのだ。ちょっと冷静に考えれば、おのずと見えてくる真実から、あえて目をそらせようとする心の働きを持っている。自分の余命が、あと10年以内、いや5年くらいだろうと理解しつつも、それに対して向き合う姿勢がない。人間というのは、なんと困った存在なのだろうか。
- ・人間はいずれみずから世を去るときを選択しなければならないのではないか。それを自分で決め、周囲にも理解されて、おだやかに別れを告げる習慣が定着する時代を想像すると、なんとなく憂鬱な気がしないではない。
- ・未来を夢見て心を踊らせることと同じように、人は過去をふり返って思いにふける。そのどちらにも優劣はない。共に私たちの人生の豊かな一部ではあるまいか。

8.「下りのなかで上りを生きる」 鎌田實 ポプラ新書 2014年3月5日

- ・残念だけど、僕たちの国はゆるやかな下り坂に差しかかっているのだと考えたほうが、かえっていい結果が出るはず。そのなかで、新しい日本を考える必要がある。
- ・一人一人が下り坂のなかで新しい生き方をみつけることができるようになった時、一人一人の人生は輝いてくるし、僕たちの国も輝いてくる。
- ・失敗の先には成功があるはず。失敗という下る道を生きながら、その先に必ず成功という上りを生きる夢を捨てないこと、希望を捨てないことが大事なのである。希望は楽観力から、うまれてくる。生きてると、常に逆境がつきものである。みんな逆境を生きているのだ。欲望を暴走させずほどほどの上りを選び、ゆるやかな成熟した生き方をしているのが、これからの新しい生き方のように思う。

-
- ・物事を悪いほうへ悪いほうへ考える人は、厳しい状況のなかで身動きが取れなくなる。楽観的に物事を見る人たちは、絶望のなかでも一歩動き出す。下り坂の運気でも閉じこもらないで動き出す。これが大事。一歩動き出してみると、血が通い出す。次々にいい回転が始まるのだ。
 - ・**どうせ下っている人生、やりたいことをやるのが大事と思っている。人に頭を下げてお願いをして、集まって来るお金を有効に使っていくことが大事だと考えている。**
 - ・下り坂の国家が上り坂に方向を変えるには、一番大事なものは雇用だ。雇用が勝負なのだ。働くことで人は立ち直れる。気分が明るくなる。未来が見えてくる。働く場があることが大事なのだ。
 - ・資本主義社会である以上経済成長は必要である。僅かでも経済成長を進めながら経済成長にしがみつかず成熟社会をどうつくっていくかということ、常に頭のなかに入れておかねばならない。
 - ・絶望のなかで希望を見つけようとするのが大事。どこに住んでいても精神的に負けないことが大事。そのためには利根的にならないことが大事なんだ。何もせずに虚無的になってはいけない。悲しむ力を育てながら、常に現実から逃げないことが大事なんだ。
 - ・どんな下り坂になっても、その下り坂のなかで、自分のやりたいことを見つけ、自己実現を目指す。仕事を大事にすること。生きがい的大事にすること。前向きで、人とつながりながら、いいことがあったときには感謝すること。

9. 「誰にも死ぬという任務がある」 曾野綾子 徳間文庫 2014年2月15日 (初出:2011年5月)

- ・死だけは、誰にも確実に、一回ずつ、公平にやってくる。実にこの世で信じていいのは、死だけなのである。
- ・修道生活は、自分の意志で選んだ選択の結果なのである。エボラの患者の世話を見続けることも、輝くような自由の採択の道なのである。危険を承知で任務を放棄せず、そのために結果的に死ぬ機会など、そうそうあるものではない、とさえ言える。それは動物ではない人間だけが示すことのできる一つの勇気で、それはその人に、きわめて人間らしい、人間にしかなし得ない死に方を与えることで、その人の生を完成させたのだと、私には思える。
- ・(上坂冬子氏と)二人とも、十分に死を意識する年になりながら、というか、その年になったからこそ、ある解放された意識にすることがよくわかるのである。今さら、背伸びして人によく思ってもらおうという姿勢がまったくなくなっている。
- ・人づきあいでも、経済的な行為においても、法廷でも、税務署でも、私たちは多分、そうした一切のごまかしや配慮がまったく不必要になり、無縁になるのを体で感じるのだ。実態は実態だ。それ以上でもそれ以下でもない。しかも現世には、あらゆることがあり得る。なにが起きても少しも不思議ではない。
- ・死は実にいい解決方法だと思う場合がある。自殺はいけない。人殺しもいけない。しかし自然の死は、常に、一種の解放だという機能を持つ。痛みや苦痛からの解放だという場合もあるし、責任や負担からの解放である場合もある。周囲の人に、困惑の種を残していくという点で無責任だという場合はあるが、死ぬ側にとっては、自然に命を終えれば、死は確実な救いである。
- ・自分の生涯に納得できれば、死を迎えやすくなる。
- ・老人は自ら納得し、自分の責任において、或る年になったら、自然死を選ぶという選択肢がそろそろ普通に感じられる時代になっている。これは自殺ではない。ただ不自然な延命を試みる医療は受けない、ということだ。そして万物が、うまれて、生きて、再び死ぬという与えられた運命をごく自然に納得して従うということは、端正で気持ちのよい推移なのである。それには、いつも言うことだが、その人の、それまでの生が濃密に満ち足りていなければならない。思い残しがあってはならず、自分の辿った道を「ひとのせい」にして恨んではならない。人は老齢になるに従って、具合の悪いことを他人のせいにしがちだ。死ぬまで人生の舵を取る主は自分だったと思える人は、あるとき、その人生を敢然と手放せるはずである。
- ・病んでいたり、豊かな実として充実していなかったり、食べた人に「これはずいぶんまずい痩せた麦だね」と言われる麦も死にがいが無い。もし麦の粒が充実していたら、それは命の終わりではなく、形を変えた継続になるのである。とすると、私たちの死後の意味を支配するのは、生の充実にあると言わなければならない。死後、人の命は誰かの命に移行するのだから、生前から人は、利己主義であってはならないのだろう。受けることばかり、得になることばかりを計算する人ではなく、多くを与えることのできる人になるにはどうしたらいいか、自分を練る他はないのだ。

10. 「死ぬときに後悔すること25」 大津秀一 致知出版社 2009年5月30日

- ・実際、いまわの際に「先生、私はもう思い残すことはないですよ」、そう胸を張った数少ない患者さんたちは、世間一般よりずっと早くから、後悔を残さないように「準備」をしてきたように思えた。彼らの生き方は、いつ死んでも後悔が少ないような、問題を後に残さない生き方である。
- ・転職したいなら、今すべきである。新しい恋に生きたいなら、今すべきである。世の中に名前を残したいなら、今からすべきである。
- ・不思議なことに、忍従に忍従を重ねた人生は、極めて日本的であることもあり、皆から尊敬はされる。けれども、実は皆を惹き付けてやまないのは、「やりたい放題」の人生である。真似できないからこそ、魅了されるのかもしれない

が。

- だから、やりたいことは普段からどンドンやるようにし、他人に迷惑を(なるべく)かけないという前提で、もう少し好き勝手に生きてみても良いものと思われる。
- できるだけ早く人生の総括はしておくべきだし、なにも老いるまで待つ必要はない。
- 生が無意味なら、人は死ぬしかなくなる。死が無意味なら、人の死は無駄死にだと感じる。だから人は、生と死の意味を求めて止まないのである。それが無意味であることを忘れていて。けれども一方で、生と死の意味を見つけるの難しいことである。
- 確かに成功者と言われるような人たちは、何かしらそのような「マイ哲学」があった気がする。もちろん「マイ哲学」が単なる快樂主義のような浅いものであった場合は、最後になって築き上げた城は崩壊したが、独自の「マイ哲学」で築いていた人間は、死を前にしても堂々たるものだった。
- 正直、死を前にすれば貴賤や地位の高低など全く関係ない。それまで社会的に大成功をおさめていた立派な社長が泣き叫んだりする。逆に、普通きわまりない(ように見える)人がまったく死に臨んで動じなかったりする。案外、得るものが多かった人間は、失うものも多く、だから最期に何かにすがりたくなるのかもしれない。あるいはまた、すがりつくことがあまりできなかった人生だからこそ、最期はなにかにすがりたくなるのかもしれない。

上海街角インタビュー ③〇

社団法人大阪能率協会アジア・中国事業支援室副室長 (海外委員)
順利包装集団董事 (在上海)
福喜多技術士事務所所長
福喜多俊夫

「中国は漢方の国か？」

3月15日付の日経新聞に「独バイエル社が中国の大衆薬大手を買収し漢方薬に進出、中国以外への輸出拡大も視野に入れる」という記事が出ていた。中薬(漢方薬)は世界的に広がっているようだ。私も上海では中医(中国医学の医師)の診察を受け、体質改善の漢方薬を処方してもらい、漢方薬局(北京同仁堂)で煎じ薬にしてもらって数年にわたって飲み続けたことがある。今も霊芝を飲んでいる。(これは肺ガンの予防効果があるといわれて飲んでいるが、学術的には効果は疑問視されているようだ)

中国といえば漢方が盛んという印象があるが、現代上海人は今でも中医(漢方医)を信頼し、中薬(漢方薬)を愛用しているのだろうか? 街の人達に聞いてみた。なお、以下では漢方医、漢方薬という表現を用いた。

1. 30歳代前半の女性

私は数年間、数度にわたって漢方薬を服用しました。漢方薬に対する私の評価はコロコロ変わります。効果を実感する時もあれば、単なる暗示ではないかと思うときもあります。総合評価をすれば、中国4千年の歴史の中で、近年まで中国には漢方薬しかなく、人々はこれに頼ってきたわけですから何らかの医学的効果はあると信じています。でも、漢方医のレベルは近年低下していると私は感じます。

日常生活の中では漢方薬と西洋医薬を時と場合によって使い分けています。即効性では漢方薬はあてに出来ません。漢方医の診断は納得できる時もあれば納得できない時もあります。年配の医師の方が信頼できます。

以前、胃の調子が悪く数カ月わたって毎週のように漢方医院を訪問し針治療と漢方薬の服用を同時にしていました。これは効果があって胃の調子は回復しましたが、針の効果か漢方薬の効果か判然としません。恐らく相互作用でしょう。

2. 40歳代前半の男性

漢方薬は効くのに時間がかかるし、手間がかかるので若い人はあまり飲みません。でも、漢方薬そのものは信用できます。今でも冬至の頃にのむ“膏方”という十数種の漢方薬を練り合わせて水あめのようにした漢方薬は、体質強化のために人気があります。漢方は十人十色、ひとりひとりの症状に応じて処方異なります。したがって、患者の状態を診断する漢方医の経験と勘が重要です。経験豊かな漢方医が診断し、処方した薬は効果があります。何十年も経験豊かな専門医のもとで修行する必要があるため、最近では漢方医の志願者が減っています。

(彼は中医大学を卒業したが、漢方医にはならなかったとのこと)

3. 40 歳代後半の男性

漢方薬と漢方医はこの 20 年間でかなり衰退しました。私が子供のころは時々漢方薬を飲みましたが、最近の子供や若い人は殆ど飲まないようです。

現代の漢方薬は使い方が大きく三つに分かれると思います。

- ① 放射線治療や化学療法のあと、身体を少しずつ回復させる目的。中国語では“調理”といいます。
- ② 慢性的な病気で西洋医薬があまり効かない病気、たとえば慢性胃炎や痛風などに使われます。
- ③ 三つ目は膏方、つまり季節が変わるときに飲みます。

私は漢方医を信用しています。ただ、漢方医は経験が必要なので、若い先生は信用されなくて世代交代のしかたが難しいです。老人は漢方医にじっくり診てもらっただけで、心理的効果で病状が回復するケースもあります。

膏方は一般に人気があって、その時期になるとテレビでも、どういうものを飲むか放送します。

また、漢方の考え方は生活の中に浸透しています。たとえば冷水は身体に悪いので出来るだけ飲まない。有名なカレーショップ、CoCo 壺番屋も店では温水と冷たい水を選択できるようになっています。また、漢方では病気は足からといいます。足が冷えると病気になりやすいので乳児には必ず靴下をはかせます。寝るときに靴下をはく人も多いです。余談ですが、上海で見かける日本人の若いお母さんは冬以外、乳児に靴下をはかせていません。あれは良くないですよ。

4. 40 歳代中頃の女性

私は漢方薬をあまり信用していないので、西洋医薬が中心です。漢方薬も歴史が長いから何らかの効能をもつものもあるとは思いますが、私自身は効果があったという事例を知りません。いろいろ効果を述べる人がいますが信用していません。

私も一度漢方医に診てもらい、漢方薬を処方してもらったことがあります。でもその薬は私には全く効果がありませんでした。

私は漢方医の診断をすべて否定するわけではありません。経験豊かな漢方医の中には患者の病状を的確に判断できる医師もいると思います。

5. 20 歳代後半の女性

私を含めて多くの上海人は漢方医を信用しています。最近の若い人は漢方医に見てもらう人が少ないですが、原因は多分時間が無いからです。漢方薬と西洋薬は違います。漢方薬の効果は直ちに現れることはないで根本的に治すのには時間が必要です。

漢方薬を好んで飲む人もいます。今病気がない人も自分の体質をもっと強くするために膏方を飲む人が沢山います。

漢方の考え方は生活と密接に関係しています。飲み物とか火鍋とかに漢方薬が入っているだけではなく、シャンプーとか日常生活用品の中にも漢方素材がはいったものがあります。

6. 70 歳代前半の男性

私は台湾人ですが、漢方医も漢方薬も信用しています。肩や腰が痛いときは針治療を受けます。効果がありますよ。安全のために自分専用の針を持って行きます。膏方は毎年漢方医の診察を受けて処方してもらいます。

7. 40 歳代中頃の女性

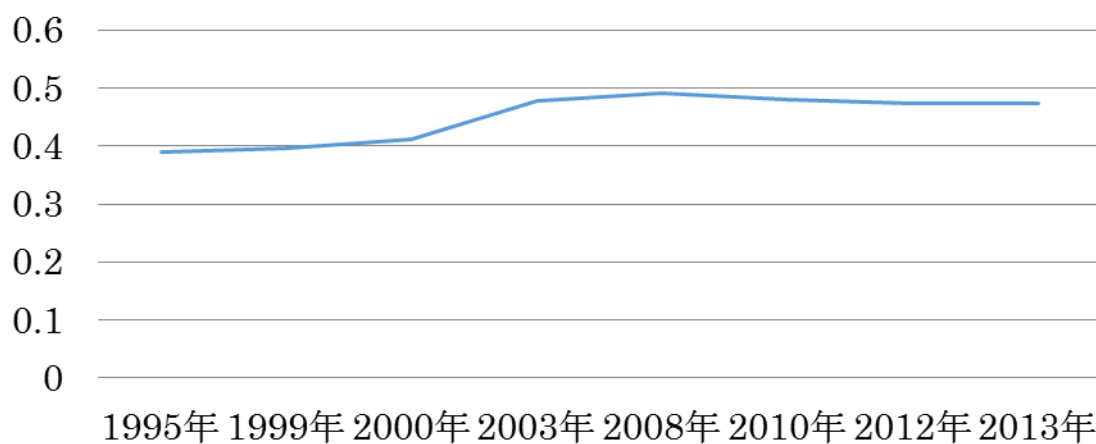
漢方医も漢方薬も信用しているけれど、病気やけがのとき私が使うのは殆ど西洋医薬です。子供には目に良いというのでマリーゴールド抽出成分（ルテイン）を飲ませています。あれは漢方薬とは違うかな。

8. 20 歳代前半の女性

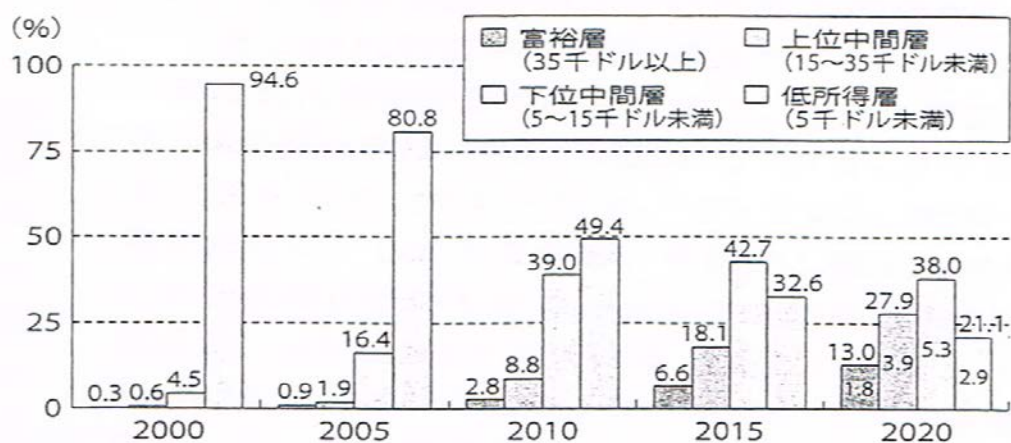
体調が悪いとき祖父の勧めで漢方医に診てもらい薬を処方してもらいました。気のせいかもしれないけれど、効果があったような気がします。今でも時々診てもらいます。漢方医はおばさんの知り合いなので信用しています。

上海人の中には漢方をあまり信用していない人もいますが、一般的には漢方に一定の評価を与えているようである。ただ、漢方医は一人前になるのに相当な経験を積みねばならないのでなり手が減ってきているようだ。また、中国の漢方薬は日本の漢方薬のように製剤されたものは少ないので、処方箋によって購入し自分

第2図 中国のジニ係数は低下に転換へ



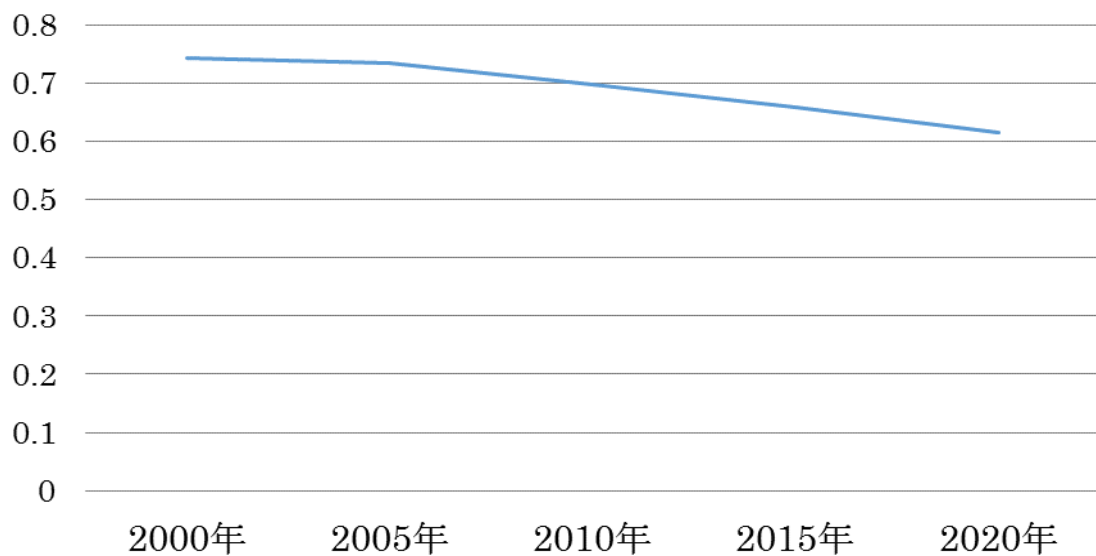
第3-1-1-6図 中国の所得階層別比率



備考：世帯可処分所得別の家計人口。各所得層の家計比率×人口で算出。
2015年、2020年はEuromonitor推計。2020年の棒グラフ上の数値は人数（億人）。

資料：Euromonitor International 2011から作成。

第4図 上のグラフから計算したジニ係数の変化



この計算では、多少の仮定を追加している。それは、「低所得層」の平均所得を 2500 ドルとし、「富裕層」の平均所得を 55000 ドルとしていることである。予測にはこの 2 階層の平均所得が示されていないので、このように仮定した。が、この仮定はジニ係数を過小にはじく原因となっている可能性と過大にはじく原因となっている可能性との両方がある。一般に言われている中国のジニ係数の値より高いので、「過大」になっているかも知れない。が、問題はその傾向であって、これは明らかである。ジニ係数は実は今や「個人間」でも縮小の傾向を示しているのである。

もちろん、巨額の富を蓄えている特別な富裕層を見るたびに「そんなことはない」と言いたい気持ちもわかる。が、一方で中産階級が急速に増大していることも歴然とした事実で、海外旅行に出る中国人や自動車を購入する中国人の大波はそのことを示している。市場調査をしている各社は「ジニ係数」こそ計算しないが、実のところ、その中産階級の増大を最も期待している会社である。他にもきっと中国の市場調査は存在するので、同様の計算を是非したいものである。

なお、私が以上にこのように述べることは、所得格差縮小の努力を軽視するものではない。中国ではすでに 10 年も前に相続税の導入が試みられているが、富裕層の抵抗で未だに実現していない。彼らは言う。「相続税のように死後の財産にまで心配を掻き立てられるものはそうないだろう。いったん相続税制度が制定されてしまえば、全額を後継者に受け渡すことはかなわず、一部を公金として国庫に納めることになる。私たち国民が憂慮するのは、それが果たして格差社会を是正する『仁政』なのか、それとも財産を『合法略奪する悪法なのか』という点にある。」(中国新聞週刊『中国 NEWS』第 1 巻第 12 号、2013 年 12 月号)

我々日本人は相続税を当然のこととして受け止めているから、このような議論は飛んでもないものに見える。が、中国の富裕層は相当厚かましく、このようなことを言っているのである。彼らとの闘いなしに中国は真の「社会主義」に向かうことはできない。

【中国経済最新統計】

	① 実質 GDP 増加率 (%)	② 工業付 加価値 増加率 (%)	③ 消費財 小売総 額増加 率(%)	④ 消費者 物価指 数上昇 率(%)	⑤ 都市固 定資産 投資増 加率 (%)	⑥ 貿易収 支 (億ドル)	⑦ 輸 出 増加率 (%)	⑧ 輸 入 増加率 (%)	⑨ 外国直 接投資 件数の 増加率 (%)	⑩ 外国直 接投資 金額増 加率 (%)	⑪ 貨幣供 給量増 加率 M2(%)	⑫ 人民元 貸出残 高増加 率(%)
2005年	10.4		12.9	1.8	27.2	1020	28.4	17.6	0.8	▲0.5	17.6	9.3
2006年	11.6		13.7	1.5	24.3	1775	27.2	19.9	▲5.7	4.5	15.7	15.7
2007年	13.0	18.5	16.8	4.8	25.8	2618	25.7	20.8	▲8.7	18.7	16.7	16.1
2008年	9.0	12.9	21.6	5.9	26.1	2955	17.2	18.5	▲27.4	23.6	17.8	15.9
2009年	9.1	11.0	15.5	1.9	31.0	1961	▲15.9	▲11.3	▲14.9	▲16.9	27.6	31.7
2010年	10.3	15.7	18.4	3.3	24.5	1831	31.3	38.7	16.9	17.4	19.7	19.8
2011年	9.2					1549	20.3	24.9				
10月		13.2	17.2	5.5	34.1	170	15.8	29.1	-0.6	8.7	16.7	14.1
11月		12.4	17.3	4.2	21.4	145	13.8	22.6	-12.9	-9.8	16.2	14.0
12月	8.9	12.8	18.1	4.1	5.7	165	13.3	12.1	-15.4	-12.7	17.3	14.3
2012年						2303	7.9	4.3				
1月				4.5	25.3	273	-0.5	-15.0	4.6	10.8	16.6	14.8
2月		21.3		3.2	—	-315	18.3	40.3	38.7	-0.9	17.8	15.0
3月	8.1	11.9	15.2	3.6	21.1	53	8.8	5.4	-6.5	-6.1	18.1	15.7
4月		9.3	14.1	3.4	19.2	184	4.9	0.4	-26.1	-0.7	17.5	15.4
5月		9.6	13.8	3.0	21.0	187	15.3	12.7	-6.1	0.0	17.9	15.7
6月	7.6	9.5	13.7	2.2	21.8	317	11.3	6.3	-16.3	-6.9	18.5	16.0
7月		9.2	13.1	1.8	20.6	251	1.0	5.7	-7.8	-8.6	18.9	16.0
8月		8.9	13.2	2.0	19.4	267	2.7	-2.7	-12.7	-1.4	18.4	16.1
9月	7.4	9.2	14.2	1.9	23.1	277	9.8	2.3	-6.4	-6.8	19.8	16.2
10月		9.6	14.5	1.7	22.4	320	11.5	2.2	1.8	-0.2	14.6	15.9
11月		10.1	14.9	2.0	20.0	196	2.8	-0.1	-8.7	-5.4	14.5	15.7
12月	7.9	10.3	15.2	2.5	18.8	316	14.0	6.0	-7.8	-4.5	14.4	15.0
2013年												
1月				2.0	20.8	291	25.0	29.0	-12.4	-3.4	15.9	15.4
2月				3.2	—	153	21.7	-14.9	-35.6	6.3	15.2	15.1
3月	7.7	8.9	12.6	2.1	21.5	-9	10.0	14.2	-19.7	5.7	15.7	14.9
4月		9.3	12.8	2.4	19.8	182	14.6	16.6	13.9	0.4	16.1	14.9
5月		9.2	12.9	2.1	19.7	204	0.9	-0.1	-14.4	0.3	15.8	14.5
6月	7.5	8.9	13.3	2.7	19.9	271	-3.3	-0.9	-17.3	20.1	14.0	14.1
7月		9.7	13.2	2.7	20.2	178	5.1	10.8	1.2	24.1	14.5	14.3

8月		10.4	13.4	2.6	21.4	285	7.1	7.1	-11.7	0.6	14.7	14.1
9月	7.8	10.2	13.3	3.1	19.6	152	-0.4	7.4	-16.8	4.9	14.2	14.3
10月		10.3	13.3	3.2	19.2	311	5.6	7.5	-8.2	1.2	14.3	14.1
11月		10.0	13.7	3.0	17.6	338	12.7	5.4	-9.3	2.3	14.2	14.2
12月	7.7	9.7	13.6	2.5	17.2	256	4.3	8.6	-3.4	-42.6	13.6	14.1
2014年												
1月				2.5	19.8	319	10.5	10.8	-8.6	-4.5	13.2	14.3
2月				2.0		-230	-18.1	10.4	1.3	4.0	13.3	14.2
3月	7.4	8.8	12.2	2.4	17.3	77	-6.6	-11.3	6.1	-1.5	12.1	13.9

- 注：1. ①「実質 GDP 増加率」は前年同期（四半期）比、その他の増加率はいずれも前年同月比である。
2. 中国では、旧正月休みは年によって月が変わるため、1月と2月の前年同月比は比較できない場合があるので注意されたい。また、（ ）内の数字は1月から当該月までの合計の前年同期に対する増加率を示している。
3. ③「消費財小売総額」は中国における「社会消費財小売総額」、④「消費者物価指数」は「住民消費価格指数」に対応している。⑤「都市固定資産投資」は全国総投資額の86%（2007年）を占めている。⑥—⑧はいずれもモノの貿易である。⑨と⑩は実施ベースである。

出所：①—⑤は国家统计局統計、⑥⑦⑧は海関統計、⑨⑩は商務部統計、⑪⑫は中国人民銀行統計による。